

リハビリテーション拒否を続ける認知症患者に対する アイスを報酬とした介入

Attempt of intervention using the ice cream to compensation for dementia patients who continue to reject the rehabilitation

○松井剛・加藤宗規

(東船橋病院) (了徳寺大学)

MATSUI Gou : Department of Rehabilitation, Higashi Funabashi Hospital

KATO Munenori : Department of Physical Therapy, Faculty of Health Science, Ryotokuji University

keywords: アイス, 強化刺激, 条件性嫌悪刺激

1. はじめに :

古賀らによると、アイスクリーム(以下、アイス)はリラックス効果を高め、脳を活性化させ、イライラ感を鎮めると言われている。今回、リハビリテーション(以下、リハビリ)開始当初から拒否が目立ち、1ヶ月経過時点においてほとんど実施ができない日が続いていた症例に対して、アイスを強化刺激に用いた介入を行い、リハビリ実施に及ぼす影響について検討した。

2. 症例紹介 :

入院中の80歳代男性。左脳幹梗塞による右重度の左片麻痺、強い構音障害が認められた。入院前の生活は要介護3から元々の日常生活動作は妻が介護していた。入院後は看護助手からの世話の拒否、帰宅願望が強く、病棟職員に対し要求が伝わらず、苛立つことが多く、周辺症状が目立つ重度認知症患者だった。2病日から病棟リハビリが開始されたが、19病日までの17日間で座位練習ができたのは2日、20病日から担当の男性理学療法士によりリハビリ室への誘導を試みるが、開始から3日連続で拒否し、トイレ誘導と入浴誘導も拒否、病棟でのマッサージや関節可動域訓練も拒否であり、運よく車椅子に乗ってもすぐに病室に帰るジェスチャーをしていた。

3. 介入前の分析と介入までの経緯 :

本症例は、リハビリ開始前から医師、看護師、看護助手が条件性嫌悪刺激化していた可能性があるなかで、ベッドサイドでのリハビリが開始となった。先行刺激である理学療法士に対しても同様の条件付けがなされ、理学療法士の顔や声が条件性嫌悪刺激化したと考えられた。後続刺激について、リハビリの実施やリハビリ室の来室は条件性嫌悪刺激化した理学療法士との遭遇となり、レスポナント行動が誘発されることが考えられた。しかも、症例にとって強い強化刺激は得られることはなく、リハビリの実施、リハビリ室への来室ができた際の称賛は頻度も少ないこともあり、行動を強化する随伴性は形成されなかったと考えられた。

4. 介入方法 :

主治医から入院中のアイスについて、アイスはリハ室冷蔵庫で管理して、アイスを食べる時には理学療法士が付き添うことを条件として、許可を得た。そして、行動として「理学療法士の指示にしたがいリハビリ室に行くこと」に加えて、「(リハビリ室での)訓練を行うこと」に対しての強化刺激を付与することを設定し、先行刺激としてその約束をした。Session1では制限無くアイスを食べても良い、Session2では行った訓練メニュー数分食べても良い、Session3では5口までとした。

ターゲット行動は、入院前に介護用ベッドからベッド柵を利用し、起き上がり、ポータブルトイレ(以下、P

WC)へ移乗が可能だったこともあり、寝返り、起き上がり、端座位、立位、移乗などの12項目とした。介入方法は、訓練メニューの優先順位を決め、嫌悪刺激が少なく、コンプライアンスの得やすい行動要素から実施することにした。嫌悪刺激の少ない順に、車椅子乗車、起立訓練、立位保持、寝返り、起き上がり、PWCへの移乗とした。行動に用いた変数は一日の訓練メニュー数(種類)とし、妻への暴力行為・嫌悪刺激と取れる回数(以下、嫌悪刺激回数)、患者が理学療法士にお礼する回数などをカウントすることとした。

5. 結果 :

実施した訓練メニュー数の経過について、ベースライン(7病日間)で平均0.1種類であったが、介入開始後のSession1(8病日間)では4種類、Session2(6病日間)では5種類、そしてSession3(13病日間)では9種類の訓練メニューとなったとともに、食べたアイスの平均口数はSession1(7日間)では6.0口、Session2(7日間)では4.0口、そしてSession3(14日間)では2.0口となった(図1、2)。嫌悪刺激と取れる回数について、ベースラインの7日間では一日の平均6.0回であったが、介入開始後のSession1では5.7回、Session2では4.0回、そしてSession3の14日間において1.7回となった。訓練中の「ありがとう」表出回数において、ベースラインでは0回、Session1では0.4回、Session2では1.4回、Session3では4.7回となった。

6. 考察 :

レスポナント消去のために用意したアイスの許可は症例にとって非常に強力な強化刺激であり、先行刺激としての理学療法士の顔や声によるレスポナント行動の誘発が解消され、同時に適切な行動の成立と強化にも作用したと考えられた。

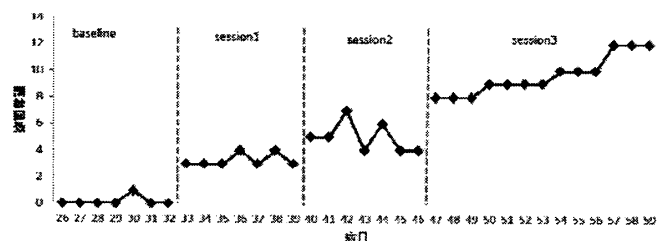


図1 訓練回数

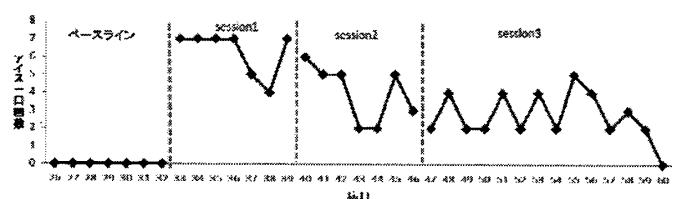


図2 アイス摂食口数